

美術界

帝展を繞つて^(めぐ)

竹田道太郎

竹田道太郎（ただみちたろう 一九〇六（明治三十九年）
—一九九七（平成九年） 美術評論家。

新潟県出身。早稲田大学卒。都新聞社を経て朝日新聞社、美術記者。女子美術大学教授、武蔵野美術大学教授。近代日本画家を対象として評論活動をおこなう。

例年の吉例回顧だと春と秋の二シーズンを一瞥すれば足りりとするのだが、今年はずうは行かぬ。五月廿八日の帝展改組を境に、全日本画壇は未曾有の大混乱にひき込まれ、半歳に亘る文部当局必死の了解鎮圧運動の結果、爾後二回の帝国美術院会員総会を経て日本画、彫刻、工芸の三分野は尚爆弾的危険性を内包する問題を幾多孕みつつも、表面は来春二月の第一回帝展を迎へる段階までに漕ぎつけたものの、来秋に展覧会を持ちこされた洋画壇は一九三五年の暮れかかる時、従来曾て見ざる現象を呈しつつ、反官展の意気軒昂に一九三六年を迎へんとしてゐる。その変り方は凡そお上の御馳走を有難たがる様に、長いものには巻かれる様に、基礎教育行き

とどかざる無き我国においては実に驚嘆すべきものである。お上が折角最後の自信をこめて投じた好餌——去る十一月廿九日発表された参与、指定といふ役付——も見事画家大衆の輿論的統一で一蹴された許りか、画家の最高地位たる勅任待遇帝展会員の席をアツサリ返上して弊衣破帽を甘んずるとんでもない会員までとび出してしまった。この政府や役人常識の所謂とんでもない人たる小杉放庵氏の挙は遂に一九三五年の斯界の紛乱騒動に最後の一石となり年送所感は、藪をつついて蛇を出した改組の親方文部当局が一敗地に塗れ、既成在野は勿論、新成在野洋画家群が高らかに勝利を謳歌してゐるといふ所だ。

* *

役人と役人的洋画家達が今日の改組に際して考へたことは帝展のオンドル育ちの所謂旧帝展系洋画大家は暖く甘いものを食はせる帝展に反抗出来るものか。在野大衆は一寸色気を見せれば食ひついて来る不気味な御時勢。たとへ悪く行つても旧帝展系と旧在野群（我洋画壇を殆んど半分してゐた両勢力）を入れかへることは可能だ。それ丈で帝展の悪弊を改めた言い訳は立つといふにあつた。ところがやつて見ると何処にも連絡の団結も無かつた筈の洋画家大衆は第二部会に結束し、二科会、春陽会、独立展と総て反官展共同声明とも思へる声明をお上、役人の思はせぶりな好餌をポンと蹴つとばしてしまつた。

* *

扱て目下の状勢を新帝展と在野に分けて見る。新帝展側は十四会員の色

分け通り七会員は二部会系。四会員は二科系だったが二科の方で除名したから今では無縁仏とも見える。国展一名と和田美術学校、そして小杉氏は春陽会へ帰つてしまつた。

参与指定では二部、二科、春陽、独立すべて返上を声明し、東光会と川島理一郎氏を失つた国画会および、春陽会の山本(鼎)、長谷川(昇)両参与と、山崎(省三)指定位のもの。結局新帝展は和田英作氏系のお弟子アカデミシアンと同系の東光会、梅原龍三郎氏の国画会一党、春陽出の三人及び二科の石井(柏亭)、有島(生馬)、安井(曾太郎)、山下(新太郎)四氏とその個人的お弟子達といふ結果になり、所謂お弟子がひどく頼りない存在である如くその心細さ謂はん方なし。

なかに、一般出品から募集して好いものを取るとか、之から新人を帝展で養成するとか、まるで寝言としか思へない言葉を漏らす帝展会員が今だにあるから尚更心細い。

何故に再改組を反帝展側が要求し、何故に彼等がかくも団結する結果になつたのかを考へないのだから困る。それはそれとしてこの大動乱によつて洋画家達が一時忘れかけてゐた芸術的自由、官僚美術の桎梏内で歪められ庄迫されて来た、進歩的洋画家達の市民権が根こそぎ剥奪されんとした時、敢然立つて擁護した芸術的自由を再認識し、確保したことは喜ぶべき現象である。帝展改革は当然行はるべくして行はれ、然も改組は改悪に終つたとはいへ、我が洋画家等にとっては、この意味で葉にこそなれ毒には

決してならなかつた。

* *

扱てこの大事件を中心に大きな社会的転回を行つた一九三五年、洋画壇もその芸術的所産に至つては極めて貧弱であつた。

春 動乱前は春台、光風、白日、旺玄社等、後日第二部会に参じた諸団体から始まり、東光会、独立展、春陽会、国展と例年通り続いた。独立展がフォーヴに行詰り新たな発展を行はんと苦悶してゐることは認められるが、何故消極的な技法による打開発展をのみ目ざして、積極的な社会観的反省と現実の再認識とに勇敢に進めないのか、諸君が消極の世界に逡巡する時、今後の発展は出来ないことをしるや。

秋の廿四人展を通じ海老原喜之助、川口軌外、曾宮一念氏等の作家を別として中山巍、清水登之氏等に今後の意気込みを窺ひたるのみ。

独立とは存在理由を全く異にする春陽会、国画会は気分を楽しみ匂ひを味はふ会。殊に春陽の小杉、国画の梅原、川島以下、木村(莊八)、足立(源一郎)、山本(鼎)、倉田(白羊)氏等の健在は扱おいて、新人島海青児、水谷(清)氏等の活躍は期待出来る。

秋 大動乱後である。先づ二科は安井無くとも気魄きぼくを十分に感じさせた。芸術的に大きな飛躍も流動もないが、力ある人々の真剣な努力は停止する所ない根強い力強さを感じる。

藤田(嗣治)の飽くなき制作力をはじめ、中川(二政)、正宗(得三郎)、鍋井(克之)、碓(伊之助)、東郷(青児)氏等と宮本(三郎)、島崎(鶏二)、

栗原（信）氏等の若い力は心強い。

二部会展は成立が芸術的動機によらないとはいへ、所謂帝展色なるものを脱する努力は十分に窺へたし、今年に全的期待をかけるのは無理である。

中村研一、猪熊弦一郎、内田巖、佐藤敬、有岡一郎、脇田和、三田康氏等の明日への発展と、辻（永）、伊原（宇三郎）、牧野（虎雄）、鈴木（信太郎）、金山（平三）氏等会員級の努力と之を支持する友情出品者の存在は我洋画壇を誤らしめぬ重要なものとなつた。この他近代性に背進する傾向をとつた東光会（高間惣七、堀田清治氏等を除く）と、銀座街頭に最も近代的な尖端性を發揮した多くのシュール派とはその芸術活動に多分の無理をしてゐる。

なほ、一九三五年には東京府美術館十周年記念綜合展やラプロード、ゲラン、アスラン等の展覧会、更に前田寛治、佐伯祐三両回顧展があり、国展の梅原氏及びそこを脱退した川島理一郎氏の個展があつて、両大家明年の前進に期待を持たせるものがあつたが、いずれにせよ一九三五年は我洋画壇にとつては再出発のためへの過渡期であつたから、来る一九三六年の進出發展こそ期待を裏切られない様にと切望してやまない次第である。

（『早稲田大学新聞』 昭和十年十二月十一日）